

# 炭焼きの 与助

【mensin】

作：近藤せいけん



### 炭焼き 与助 その三

貧乏長屋と呼ばれる、この長屋は六世帯の住人が住んでおり、隣が、漁師の五作。そのとなりが、大工の富。またとなりが、棒振りの金治。一戸建ての住まいが、大家の、たぬきこと、初吉。そのとなり貸家が左官職人の馬吉。子供たちが、いつも駆け回る、賑やかな長屋であった。

「さあ、そろそろ帰るぞ。日が落ちないうちに、煤ヶ谷村（すすがやむら）につかなくちゃ」

「良吉、おかあさんと、きくちゃんの面倒をみるんだぞ。」

「明日、また来るよ。食べ物、まき、炭を、沢山持ってくるからな。楽しみにしてる」

「じゃ、また明日なあ～」

「お兄ちゃん。きっと明日来てよ～待っているから」

「ああ、必ず来るよ」

与助は、良吉、きくに見送られて、貧乏長屋をあとにした。

足取りはなぜか、軽かった。

翌日、日が上がる前に、起き。牛、馬の世話をし、にわ鳥の卵を集め、畑の野菜を収穫した。一段落した後、荷車を出し、貧乏長屋の良吉に運ぶ、食べ物、まき、炭を荷車に積み込んだ。

「さあ、太郎や。厚木宿に出かけよう。」と何か、気分は晴れやかで、心が弾んだ。

貧乏長屋に着くと、良吉と、きくが、長屋の入り口に立っており、与助の姿を見つけると、駆け出してきた。

「わあ～、お兄ちゃん、本当に来てくれたんだねー」

「きくも、お兄ちゃんが来るのを、待ってたよ。朝から、待ってたよ」

「そうか、そうか、さあ～荷物を、降ろしたり、降ろしたり」

「昨日は、おなか一杯食べて、ぐっすり寝られたよ」

「う～うん、しもじく、なかったよ」

「ありがとう、お兄ちゃん」

与助は、良吉ときくが、本当の兄弟のように、思えた。

「心配するな。いつも、お兄ちゃんが運ぶから、おなか一杯食べさせてやるよ」

「さあ、良吉、家の戸を開けろ。荷物を入れるぞ」

「こんちわ、お仲さん、山の物を持ってきましたぜ。使ってください」

「与助さん、すまないねえ、本当に、本当に

ありがとうございます」

「な～に、お仲さん、困っているときは、お互い様よ、俺に出来ることは、精一杯させてもらうよ」

長屋の子供たちが、大勢、よって来た。

「すごいな。こんな沢山の、炭、野菜、食べ物、見たことがなかった」

「あれ、これは、麦だ。こんなに一杯。いいな～」

「俺んちも、欲しいなあ～」

「そうか、待っている。みんなの家にも、分けてあげるよ」

「わあ～すごいな。」

お仲さんの家に食べ物や炭、まきを運びこんだあと」

与助は貧乏長屋の、住人にも、声をかけ、おすそ分けに歩いた。

貧乏に負けず、みんなで助け合って、生きていることを、良吉と、きくから聞いていたからである。

炭は一俵ずつ、まき、卵、さつま芋、野菜は少しづつ、分けて届けた。

「与助さん、いいのかえ、わしらまで、頂き物して、ありがたい。ありがたい」

「うちの、がき達も、食べ盛りで、本当に助かるよ」

「あんたは、若いがしっかり者じゃねえ」

与助は貧乏長屋の衆が、何故か、昔からの付き合いが、あった、懐かしい、大事な人と思い始めていた。

長屋の衆を、おすそ分けで、回るうちに、この善良で、心優しい、貧乏長屋の人々のために、何か、手助け、出来ないか考えていた。

貧乏長屋の前は、こんこんと湧く綺麗な泉があり、その水が疎水に流れ、長屋の衆は、汲んで、生活用水に、洗い物、

夏場は、野菜、果実を冷やす、水として、天然の恵みを利用していた。

「さあ～良吉と、きくちゃん。手伝つてちょうだい。

昼めしを作ろう。そこの麦を杵で、四人分計って、釜に入れて、水でといてちょうだい」

「卵は鉄鍋で焼いて。漬物をきざんで。大根で味噌汁を。さあ、さあ～、つくろう」

「わあ、楽しいな、うれしいな」

「こんなに楽しいのは、久しぶりだなあ～」

小さな膳に、出来上がった昼餉（ひるげ）を並べて、各々が座った。

「いただきます。今日はごちそうだ、あははは」

「良吉さん、ありがとう。いただきます」

与助は長い間、忘れていた暖かい家族団欒の幸せを感じていた。